ドライブ・ナイツ

蜜柑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドライブ・ナイツ

【Ｎコード】

Ｎ３９０５Ｘ

【作者名】

蜜柑

【あらすじ】

母なる銀河に戻るために作られた人型宇宙探査ロボット「ドライブ・ナイツ」

それでも、地球も私たちの知る太陽も見つからない。

ただ帰りたい一心で作られたＤＮは、帰れない諦めの中で歪み、戦争の道具でしかなくなっていた。

ノアの箱舟（前書き）

ずっと前に書いていたロボットバトルものをもう一度設定等修正して書かせていただきました。
幼稚な作品ですが読んでいただけたらと思います。

ノアの箱舟

消える瞬間は突然だった。
気づいた時には、太陽は私たちの知る太陽ではなくなっていた。
第二宇宙と名付けられたこの世界は火星とその周囲の星を飲み込み
自身の一部とした。
火星圏の全ての人々を連れたまま・・・

なにもかもがわからない。
私たちの住んでいた銀河に戻る方法も。
ここがどこかさえも。

だから人々は開発した。
宇宙開拓用の人型ロボットを。
母なる銀河に帰るために。
それが、ＤＮドライブ・ナイツの始まりだった。
初の一人乗りＤＮホープは宇宙を飛び続けた。

しかし、我々が第二宇宙に飲み込まれて２００年がたとうとする今
でさえ
我々は帰れずにいる。

ここは第二宇宙。
人は世代を重ね。
ここで生まれた人々ばかりになったこの世界は、帰ることを諦めて
いた。
この世界で生きると決めた。
しかし、人々は人種の壁も隣人との壁さえもをこえられなかった。
この世界でも、人は戦うことを忘れず、奪いあって生きていた。

第二宇宙における世界大戦。
宇宙において圧倒的性能を持つドライブナイツを用いて・・・

「始めようか！選定を！」

第三世代　エス

タレス基地
軍事企業フィフスアークの所持するドライブナイツ試験用基地である。
見慣れないＤＮがいるのはいつものことだった。
しかし、今回の機体は存在感が違う。
全身白はカラーリングが終わっていないからだろうか。
高さは２３メートル、ＤＮの平均は２５メートル。多少小柄に見える程度だ。
シルエットも対して目立った特徴はない。
しいていうなら、アンテナやカメラが最新型で多めに取り付けられているように見える。
武装も今ひとつパッとしない。
ビームのアサルトライフル。量産型ＤＮ「Ｎ０７Ｊ型」の標準装備と同じものだ。
ビームソードも同様に流用のもので、特徴といえるものはビームダガーくらいと言える。
電源を搭載しているため、投擲武器として使用できる。

そんな平凡にしか見えない新型ＤＮ「エス・ケラーテ」は、初の第三世代と呼ばれるＤＮとして開発された。
その特徴はソフトウェアにあった。
パイロット支援のアニマルＡＩ「エス」の搭載である。
エスは猫型ＡＩであり、学習能力があった。
これを成功させ、第三世代として普及、支援ＡＩの独占による市場の制圧がフィフスアークの目的である。

「試作一号機の試験をはじめます。スパルナ大尉カタパルト１から

発進を」
「了解　ケラーテで出すぞ」
第三世代が白い閃光となって宇宙へ飛び立つ

「スパルナ大尉　聞こえるか」
「また秘密の話ですか　中将」
「・・・相手は傭兵だ。殺してかまわん。第三世代の実力をだしきれ。コンペで勝たせるためにな」
「了解。武装はたいしたことないが機動性能は良い。コクピットに一発ずつ叩き込んでやるよ」

試験区域には既にＮ０７Ｆ型が５機待ち構えていた。
「リーダー機から全機。これより試作一号機との戦闘にはいる。大事なテスト機だ。大破させるな」
「たまたまリーダー機の奴が命令してんじゃねぇよ」
「・・・」
リーダー機の傭兵パーシバル・クロイツェルは深いため息をついた
「負けるためのテストだから仕方ないか」

小さな戦争

「きたぞ！」
傭兵の一人が叫ぶと同時に主装備のアサルトライフルを連射した。
しかし、エス・ケラーテは既に射線からずれスラスターをさらにふかしていた。
「あたれっての！」
二機の攻撃をかわし間合をつめる。
パーシバル・クロイツェルは疑問を感じた。
「打ち返さないとテストにならないだろ・・・？」
その答えはすぐにでた。
「チェック」
エス・ケラーテのビームダガーが最初に撃った傭兵のコクピットを貫いていた。
「なっ！殺すための攻撃か」
パーシバルは即座に味方に通信をいれた。
「これはテストじゃない。敵は殺す気で来てるぞ。弾幕を張って試験区域から抜けるんだ。」
しかし、傭兵達は聞く耳を持たなかった。
「返り討ちにしてやる」
そう言ったパイロットは次の瞬間、光の中で蒸発した。

「さて、そろそろ第三世代のテストを始めるか」
スパルナはＡＩエスを起動させるスイッチを押した。
「エス起動。マスター確認。」
「パス確認完了。キャットタイプＡＩエス出現します。」
「マスター。戦争をはじめますか？」
「殲滅作戦だ。」

「了解。」
左腕が自動で稼働しアサルトライフルを撃った。
その弾はパーシバルのＤＮがさっきまでいたところを通過した。
「敵速度の入力を修正。」
「予測射撃適正化。」
アサルトライフルの銃口はまるで敵のＤＮと繋がっているかのような動きを見せた。
次の弾丸はパーシバルのＤＮの右手の装甲が薄い部分にあたり右腕を中破させた。
「未来予測射撃か。素直な奴だな」
「敵の攻撃能力４０％の低下に成功。」
「狙うのはコクピットだ。」
「了解。」
再びアサルトライフルがパーシバルを狙う。
「甘い。予測と分かれば簡単によけれる。」
速度を落とし回避も三次元的に行うことで弾はパーシバルのＤＮに触れることができなかった。

「各機退避。時間を稼ぐ。」
「ＡＩ！逃げる奴からだ」
「了解。」

次の弾は逃げるＤＮの背中からコクピットを撃ち抜いた。
「敵コクピット破壊。生命反応なし。」
「いいぞ。次だ。」
「ターゲット捕捉。射撃開始。」
さらに攻撃をしかけるエス・ケラーテと狙われたＤＮの間にパーシバルは飛び込んだ。
「ペンタルフィールド緊急展開。」

ＤＮの左手を前方に掲げると五角形のビームシールドが広がり弾を受け止めた。
テストのターゲットに装備されているようなものではない。
「あの的・・・スパイか」
「エス。あれを落とすぞ。」
「了解。左腕ソードの使用を提案。」
「黙って弾ばらまいておけ。」
「了解。」

エス・ケラーテは左腕でアサルトライフルを撃ちつつ右手からビームダガーを放ちパーシバルのＤＮに追い討ちをかけた。

「二機を相手にしてるようだ。ペンタルフィールドも持たない。」
パーシバルはスモーククラッカーをなげ撤退する。
定石通りスモークの中に機雷を撒くのも忘れない。
「スモーク内機雷確認。操作の一任を提案。」
「ふざけるな！俺に任せればいいんだよ。」
スラスターをさらにふかせながらスモーク内にエス・ケラーテを突撃させる。

送られてくる機雷の位置情報をもとに回避行動を続けスモークを突き抜ける。
しかし目の前にはパーシバルのＤＮの左手が待っていた。

学習能力

パーシバル・クロイツェルの操るＤＮの左手から再びビームシールドが展開される。
それに対して、スパルナはビームダガーで切り裂こうとした。
しかし、エス・ケラーテのダガーを持つ右腕はビームシールドに捕らわれ大破した。

「くっ！左腕操作返せ。」
そういいながらスパルナは距離を取るように後退させた。
「早くしろ。」
「データ収集第一フェーズ終了。エス最適化開始。」
「最適化完了。第二フェーズエス再起動。」
「えーい！」
スパルナはエスに電源を落とすスイッチを押そうとした。しかし、力をいれてもスイッチは機能しない。
「左腕返せ！」
「拒否。攻撃開始。」
エス・ケラーテは左腕にビームソードを展開された。

「接近戦の不利を理解しないパイロットだな。」
パーシバルは左手の盾でソードを受け流しながら盾で敵を引き裂く機会をうかがっていた。

エス・ケラーテが盾で弾かれた勢いをそのままに突きの姿勢に入る。
パーシバルは絡めとるべくビームシールドを大きく展開させる。
五芒星のように広がるそれはビームを掴むことができる。

エスは左腕に突きをはなたせる。

ビームソードに絡まるビームシールドが突く力を奪って行く。
そして、パーシバルのＤＮの左手直前で停止した。

しかし、そこまでエスは計算していた。
ソードを掴んで動けない左腕に対して、腰から下に射出したビームダガーを蹴り上げ突き刺した。
「くっ！ペンタルフィールドが消える。」
パーシバルは即座に脚のシュトゥルムファウストを撃つ。
しかし、猫を思わせる動きで回避された。
打つ手は後退しか許されない。
エス・ケラーテは追撃を加えるべく追う。

トドメをコクピットにつきたてようとビームソードを構えるがそこでとまった。
「試験区域からの撤退を確認。攻撃停止。」
「・・・」

エス・ケラーテのパイロットは既に気を失っていた。

いつもと変わらない日常

「再び神の審判の時がおとずれます。神の救いの手は我々信徒にさしのべられるでしょう。さあ、神の声に耳を傾けるのです。」

火星は多くの国がそれぞれの領地を持ちそれぞれに支配していた。
ここは大和という国の都市キョートシティー

「最近こういうの多いなあ」
「そうだね。何か悪いことが起きるのかもしれない」
「うーん・・・」
高校の制服を着た男女はそんな話をしながら帰っていた。
「ジグは神様信じてるの？」
「そういうわけじゃないけど。ヒイラギは信じないのか？」
「まだ見たことはないねー」
「見たら信じるのか？」
「見たら仕方ないよね」
「そうだな」

ーよしっ　今日こそ誘おうー

「とっところで　　ツッ　ツキヨ！」
「ん？」
「これから俺とあそっ
「ごめん　今日は約束あるんだ」
「・・・そうか」
「じゃあ、また明日学校でね」
「・・・」

ー今日もダメだった・・・だけど諦めないぞ！まだ明日も明後日もあるんだからなー

少女にとっての始まり

柊　月夜は高校３年生　将来の夢は未定

ーだってそのほうが楽しいじゃないー

誰にでも優しく分け隔てなく接する女の子
実際、一緒に帰っていた少年ージグリッド・ユアンは、大和人の父とスミノフ人の母のハーフで、周囲の人からあまりよく思われていないが、月夜だけは友達として仲良くしている。

そんな少女の始まってしまった日
それが今日１０／２３

「たっだいまー」
「おかえり　月ちゃん」
「今日は私のご飯当番だよね」
「月ちゃんの方が美味しいものね」
「へへ　おまかせあれ」

早速、制服の上にエプロンを着て台所に立ち、トトトトンと気持ちよくジャガイモを切ってゆく。カレーを作らせたら三ツ星を自負している。

テレビの前でべたーっと垂れているのは専業主婦　柊月読　元ＤＮパイロット　家事全般苦手

娘のたてる音を愛してまったりするこの時間が大好きだ！ほんとに！

だから臨時ニュースの警報音に対してテレビをぶん殴った！全力で！音をたてなくなったテレビに満足していると携帯電話が鳴り響いたのでこっちも殴ろうと思った！着信音が夫だったので我慢した！全力で！

「月読！月夜はいるか！」

「今一緒ですよ」

「それじゃ約束のところに避難しなさい」

「！」

理由は聞かない。夫が言うのだからそういう時なのだ。

月ちゃんにガスの元栓から示させて、かねてから用意していた避難バックを背負い言った

「月ちゃん　愛してる」

いつだって全力だから後悔はしたくない

守る覚悟を決めてマンションの扉を蹴破った

全力で！

最初の逃走

目指す地点はマンションから2．3ｋｍ
最短ルートも何度も走ってチェック済
家事をしない専業主婦の底力です！

「月ちゃん　大丈夫？」
「うん　いつもこれぐらい走ってるよ」

私は目的地までだいたい半分来たところで避難する理由を知った。
この爆発音は量産型ＤＮがよく使うアサルトライフルのカスタムでつけられるグレネードだ。
防衛する側である大和自衛軍の使うべきものではない。
つまり侵略を受けココまで侵入されているのだ。
近くのビルが爆発、崩壊した。
土煙の中からでてきたＤＮは容赦無く逃げる人々に向けアサルトライフルの弾をばらまいた。
人から見ればあまりの大口径。死んだというよりも消えたという表現が適切だと思った。
きっと月ちゃんもみんな隠れられたと思っただろう。
でも月ちゃんだけは私が守る！
道路に倒れていたバイクを起こし、ついたままのキーをねじる。

大丈夫！生きてる！
敵のＤＮが私に気づいた。スミノフ製第二世代ネウストラシムイ。
量産型アサルトタイプ。動きがぎこちなく不慣れなことがわかる。
「私に力を貸して！名も知らないバイク！」
月ちゃんを後ろに乗せ、アクセルを回す。
エンジンが暖まって敵がロックオンできるようになるのは知ってる。

経験の少ないパイロットに熟練者同様の性能を発揮させることをコンセプトにした第二世代ＤＮ。その特徴が熱源ロック式未来予測射撃。
正確な予測射撃は素人にありがちなばらまきよりも読みやすい。
バイクを自在に操り予測の位置をさける。
カーブの侵入速度もありえない域で倒れようとするバイクをさらにアクセルを回し無理矢理立ち上げる。
背中に感じる月ちゃんを全力で守り切るために危険域での走行を続ける。
道路を走る敵に加速を許さない細かいカーブでバイクを走らせる。
アサルトライフルの弾丸を避け続け目的地を目指す。

この時の私に誤算があったとすれば今回のスミノフ軍の侵攻作戦が本気だったと言うことだろう。
目的地の公園についた時には３機のＤＮに囲まれていた。

セーミラズルシェーニャの猛威

「ちょっとやばいかも」
本当は月ちゃんに心配かけたくないけどもらしてしまった言葉だった。
こう囲まれてしまっては誰でもピンチってわかってしまう。

月ちゃんだけでも逃がさないと・・・
敵はわざと弾を外して楽しんでいる。

「お母さん・・・」
「大丈夫！全力で絶対守る！」

敵は泣きも叫びもしない親子に飽きてきたようだった。
そして、踏み殺すことで決定したらしい。
足を高く上げて踏みおろした。
はずだった。
踏みおろす足がなくなっていたが・・・

一機がバランスを失って倒れるなか、残りの二機は周囲を警戒するも、次の瞬間には、コクピットが消し飛んでいた。
倒れたＤＮもとどめの一撃で動かなくなった

着弾地点を元に射撃地点を見ると、山の上で狙撃特化型第二世代ＤＮ雑賀・撃が手をひらひらと振っていた。
どうやら元同僚の誰からしい。

とりあえずの安心を得て手を振り返そうとした。そんな場合じゃなかったのに

雑賀の周囲は真っ赤に染まっていた。
雑賀のパイロットも気づいたのだろう
慌てて紅い光から脱出しようと走らせたが、あまりに広い範囲の照射から逃げられない。
紅い道を追い掛けるかのように白い光が降り注ぎ、紅く染まっていた全てのものを溶かした。
スミノフ軍の最大戦力と噂される移動拠点グローズヌイ。超大型宇宙戦艦と言えばわかりやすいだろう。その最大の特徴はセーミラズルシェーニャと呼ばれる7つの巨砲。
それがキョートシティーを狙い放たれたのだった。
全てを融解させ、蒸発させるだけで飽き足らず、空気を巻き込む莫大な熱量は周囲に嵐の様相を示す。

月ちゃんを庇った背中にいくつもの瓦礫が当たり肋骨が幾つか砕けた。

「月ちゃん！石が降ってくる前に、あの階段を降りるよ」
目的だった公園のトイレ
隠されていたその階段は既に剥き出しになっていた。
今やシェルターなど意味をなさない。
けど！ここには月ちゃんを守る希望がある！

ＨＯＰＥ＝希望

階段の下にある大きな空間。シェルターと言えるだけの頑強な作りになっている。
柊月夜の父　千夜の研究所だった場所。

そこには一機の古めかしいＤＮがそっと眠りについていた。

「月ちゃん　少しこの部屋に入っていて」
「うん」
シェルターの中にもうひとつのシェルターを作ることで最も頑丈になった部屋にいれる。
一秒だって月ちゃんの音が消えるのは嫌だけど・・・

急いで起動させなければ
最初のドライブ・ナイツ　ホープ　希望を！
製造されて既に１８０年　眠りについた希望
ただ母なる宇宙を求めて飛び続けた
白と青で構成されたＤＮ
ショルダーアーマーに書き込まれたＨＯＰＥの文字はかすみ、希望を失った様に思わせた。

それでも月ちゃんを守る最後の希望だ！

胴のサイドのパネルを開け、コクピットを開けるスイッチを押した。
しかし、ロックの解除された音だけでコクピットがあく様子は無い。
どうやら電力が足りないらしい。
仕方なく梯子を使って胴体に登り、胸の真ん中にあるハッチに手をかけた。

開けようとする健気なモーター音がする。

「一緒に引っ張るよ！」

全力で引くと軽く開いた。

「どれだけ非力なのよこの子は。それにしても紙装甲ね。今の機体じゃ考えられない」

そんな文句に怒ったのかモーターがぷすんと止まり閉まり始めた。

謝罪の言葉をかけつつコクピットに乗り込む

バケットシートは悪くない

観測者用の後部のシート周りの補強材の硬さを確認しつつ、月ちゃん守らなかったら許さん！と願いを込めた。シートに座り込み、ベルトでしっかりと固定する。

起動キーを握り

「希望！私に力を貸して！」

ねじる。

それに答えるように力強くアイカメラが発光する。

目の前のディスプレイに希望の文字が浮かび上がる。

達筆だ！と感動。

ロータリー型のエンジンは静かに、だが力強く全身の駆動系に力を伝えている

「反撃よ！と言えないところがさみしい・・・第二回逃走大会よ！」

黒鷲部隊

ＨＯＰＥが起動した頃、グローズヌイのセーミラズルシェーニャの砲身の側面に設置されたリニアカタパルトから数十機のＤＮが発進していた。
その中でひときわ目立つ黒いＤＮ
第二世代エース専用カスタム機チョールヌィイ：オリョール
主武器ヘヴィバズーカを右肩に担ぎ、左手に大口径ハンドガンを構える　黒鷲の名でしられる
そのパイロットはギャラック・ドボルスキー　長く続く武人の家系であり、スミノフを代表するＤＮパイロットの１人
彼を中心とする黒鷲部隊は、先に降下した使い捨てのパイロットとは違い、熟練した戦士達だ。

「この様な戦いは武人としての恥ではあるが、武人である前に我らは一兵士。全力を持って任務を達成する」

大気圏が近づき、突入用使い捨てシールドを展開させた。
目指す都市は既に赤く燃え上がり、蹂躙され尽くしている。
いかに早く敗北を認めさせるかがこの都市の被害を抑えることに繋がる。

「全ての敵戦力を無力化し、戦闘の終結を急げ」

キョートシティーの、赤く染まった空に黒い鷲が降り立つ

第六地獄の開演

「月ちゃん　しっかりベルトした？」
「全力でベルトしたよー」

そんな安全確認も五回目
まだまだ不安だけど
あの赤い死がいつここを襲うかもわからない
「じゃ外に出るからね」
搬送用エレベーターにのってスイッチを叩かせる。
次々に扉をあけながらエレベーターが上がって行く。
地上で待っているのはきっと地獄だ。
月ちゃんだけは守る！全力で！と決めたけど、今までの日常の一部だった人達が気にならないわけじゃない。
でも、戦うことを選べば、一番大事なものを失うかもしれない。
目標は、民間星間航宙船発車場。
預かってもらっている単機打ち上げ様ロケットを使って宇宙へ逃げること。
多くのステータスで第二世代に劣るホープだが、目的が星間移動の航宙速力は第二世代よりも有利と言える。
背中のX型スラスターはハンパないのだ！

逃走一択！他のものは見ない！
そう決めて最後の扉が空いたところで外に飛び出した。

地上に待っていたのは第六地獄　焦熱地獄だった。
全てが紅に染まっている。
溶けるか燃えるかしか許されない世界。
「これが人のすることなの！？」

ここに逃げるまでにも悪意を見てきた月夜でも、こんな悪意には耐えられなかった。
観測用後部コクピットは、地獄を余すことなく観測者に伝えていた。
早くこの地獄を出ないと月ちゃんの心が壊れてしまう
月夜は目標地点に向かってホープを走らせた

専業主婦の実力

山の中腹から出たホープを街の中に走らせる。
味方識別信号を探すも反応はなく、熱源レーダーや、音感センサーには、敵を意味する赤い点が大量に溢れている。
後ろからは既に5機を超えるＤＮが追いかけてきている。
ビル群を利用して、敵から直線的に見えない様にしているがレーダーまでは回避できない。

「このまま発射台に乗れば的にされちゃうだけね・・・」
「お母さん！あんな奴ら倒しちゃえばいいんだよ。」

戦場の相手を殺すことの是非を問わなくさせる空気が、娘にさえも影響を与えていることを感じる・・・
しかし、発射場まで距離もなく、敵を止める事の必要性がでてきた。
「私の腕があれば、敵を止める事もできちゃうのよ？殺す事なくね！」
ビルの上からブレードを構えって突撃をかけてくるスミノフ軍第二世代ネウストラシムイの斬撃を屈んでよけ、コクピットにカウンターの拳を叩き込む。
勢いのつき過ぎた敵機のコクピットが潰れない様に拳を引きながら、気絶するだけの充分な衝撃へと調整してある。

次は前方から火炎放射器を構えた敵が飛び出す。
Ｘ型スラスターを活用したバレルロールで火炎を回避しつつ腰にセットされている単発式ハンドガン星喰を抜く。
銃身のやけに太いそれは大口径のハンドガンにも見えるが、専用の弾丸はリング状で、内側は螺旋になっている。
周囲の空気を飲み込み、嵐の様に周囲の物を巻き込む弾丸を放つ。

その嵐を敵の右肩に向けて放つ。
右腕が武器やバックパックごと飲み込まれ、収縮した空間でぽんっと小さな爆炎を残して消えた。
腰部のマガジンから弾丸を取り出し、星喰に弾丸を込める。
左右から飛び出してくる敵に対して、ブレードで突撃してくる方に、あびせ蹴りで頭を吹き飛ばし、その間に、アサルトライフルを構える敵の足を星喰で喰らいつくす。

「吐きそう・・・」
「キャー！月ちゃん我慢してぇー」

希望ＶＳ黒鷲

発射台が視界に入る距離になった

「お母さん。ここで全部止めないと飛べないよ」

残ってる装備を確認しつつレーダーを確認する。星喰用弾丸２発、小型ビームチェンソー１本、ＥＭＰグレネード一個。
直前に停止させて近くで倒れているＤＮのショルダーアーマーには黒鷲のエンブレムが入っている。
今の装備でスミノフ軍最強の一角と言われるエースを叩き伏せられるだろうか。

そして、ある兆候が現れる。
レーダーに映る周囲を囲んでいた敵がレーダーの圏外に向けて後退し始めた。
代わりに、レーダーは上空より急速接近する物を捉えアラートを鳴らす。

「お母さん！チャンスだよ！これをやっつけたら飛べる！」
「うん。しっかり食いしばって舌を噛まないようにね！」

左手にビームチェンソーを構え、臨戦体勢を整える。
土煙を上げ、第二世代チョールヌィイ：オリョール　黒鷲が着地した。
希望と黒鷲が向かい合う。
「我はギャラック・ドボルスキー。貴君に降伏を求めたいが、そうもいかんようだな　。」
「そのようね。この子を宇宙にあげるまでは絶対に聞けない話よ」

「それでは、貴君を止めさせて貰う。武人としてお相手願おう！」
右肩のヘヴィバズーカで狙う。
しかし、狙ったところに既に希望はいない。
普通のＤＮにはできない空中での回避行動を行う希望。
熟練者であるほどその動きを予想できず対応に遅れをとる。
しかし、幾多の戦場を駆けたギャラックにとって、想定外は想定内。
その場で相手を学ぶ。
希望も黒鷲の回避に必中をきする弾丸を放てない。
そうして、互いに一発も打つことなく戦闘開始から5分がたった。

「見えてきたな。しかけるぞ！」
「わざと見せてんのよ！」
黒鷲は星喰の照準の前に躍り出た。打たせる陽動だ。
それを理解して、相手のど真ん中に向けて星喰を放つ。

ギリギリで避けてからの発射時の硬直に対する攻撃こそ、ギャラックの切り札。
しかし、星喰は弾丸以上に空気ごと巻き込む面の攻撃だった。
「ぬおー！」
避けたはずの猛威は目の前にあった。

右足にさらに地面を蹴らせ右に回避するが、左足の膝下を喰われた。
そのまま倒れこむ。
しかし、終わってはいなかった。
倒れながら右肩のバズーカを放つ。
それを月読は余裕をもって回避する。
バズーカの弾は虚しく希望の横を抜けていった。

しかし、希望は後方から攻撃を受け、前方に吹き飛ばされることになる。

勝利と敗北

「なっ！」
後方からの衝撃を受け、希望は前方に吹き飛ばされた。

レーダーで近くに敵がいないことを確認していた。
バズーカに続いて黒鷲の打ったハンドガンの弾もしっかりと回避した。
しかし、弾丸が直撃したバズーカの弾の爆発範囲内からは回避していなかった。
そして、戦闘を想定して作られていない希望にとって後方からのダメージに対する用意は無かった。
Ｘ型スラスターも大破し、空中で姿勢制御ができるような状況ではない。

黒鷲はさらに吹き飛ぶ希望に追撃を加えるべくハンドガンの狙いをつける。
「久しぶりに武人として満足する戦いであった。強敵よ感謝する」

パーンと響く発砲音

しかし、ギャラックは敵を撃破したか確認できなかった。
黒鷲のモニターは沈黙し、エンジン音も急速に失われていった。

「ギリギリの勝利ねっ！」
落下中に左手のみで機体を再び空中に跳ね上げ、右手でＥＭＰグレネードを黒鷲に直撃させた。
最後の弾丸は、希望の肩を抉ったが止めるにいたらなかった。

しかし、この戦いは月読にとって敗北であった。
なぜなら希望にはもう宇宙を渡るためのX型スラスターがないのだから。

スミノフ軍は黒鷲の敗北に衝撃を受けたようだが、再び包囲を狭めだした。

「お母さん・・・」
「ちょっと待ってなさい。千夜さんはいつも私が困った時に助けてくれる人なの」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3905x/

ドライブ・ナイツ

2012年1月6日11時52分発行